

桑高祭うどん部屋

桑高同窓会長 西羽 晃

桑高同窓会の事業として桑高祭に「うどん部屋」を出店しようとの話が出た。役員の中の事業担当者が責任者となり、チームを組んで推進することにした。

そもそも桑高に「うどん部屋」が出来たのは、昭和 28 (1953) 年ころかと思われる。そのころは定時制のみにあった。全日制の生徒も部活なので遅くなると、うどんを食べてから下校した。昭和 30 年卒業の私もしばしば利用した経験がある。しかし、値段や味はさっぱり覚えていない。

『桑高百年—三重県立桑名高等学校創立百周年記念誌—』によると、全日制に「うどん部屋」が出来たのは、私が卒業した後の昭和 31 年 9 月である。定時制だけでは採算が合わぬので、全日制にまで広げたようである。当時の値段は「天ぷらうどん」が 1 杯 20 円だった。当時私が通っていた大学の食堂では「しっぽくうどん」が 1 杯 10 円だったように記憶している。

その後、木造校舎が鉄筋コンクリート校舎に建て替えられ、「うどん部屋」も充実していった。昭和 42 年ころには 1 日 450 杯も出た日があった。その頃の全日制の生徒数は 2,200 人ほどであるから、約 5 人に 1 人は「うどん」を食べた勘定になる。

男子生徒たちは、午前の 3 限目に弁当を食べ終えて、昼休みになると「うどん部屋」へ走った。僅かな時間に注文が殺到して、大混雑となり、順番争いもあった。朝から準備する方も、昼には戦場のように追われた。定番は「いもちく(イモとチクワ)の天ぷら入り」だった。値段がわかっている最後は昭和 58 年で 150 円だった。

時代ともに盛況だった「うどん部屋」も利用者が減ってきて1日に150杯ほどに落ち込み、昭和63年が最後になって閉鎖された。昭和と共に「うどん部屋」は無くなったのである。翌年の平成元（1989）年の桑高祭で家政科の生徒が復活させたが、その後は絶えていた。

今回は20年余ぶりの復活である。実際にどのように行うのか、同窓会長としての私は心配して見ていた。8月に試食会をするので、参加してほしいとのことで、行ってみると、桑高の卒業生は流石に人材は豊富である。同窓会の役員の中に、「うどん」を趣味にしている人が居て、彼がチーフとして采配をふるっているし、助手を務める人たちも集まっていた。昭和50年前後の卒業生で「うどん部屋」世代が中心だったが、中には平成14年卒の女性、平成19年卒の男性など「うどん部屋」世代でない人も混じっており、頼もしい限りである。来年からも続けるつもりで、テントや調理器具も購入した。

スタッフの中には顔の広い人も居て、中日新聞、桑員ホームニュースへ取材の依頼をしてくれた。とくに中日新聞は事前に大きな紹介記事を書いてくれた。お蔭で大々的な宣伝となった。私も取材をうけ、「単なるうどんを売るのではなく、付加価値として青春の思い出を付けて提供します」旨を答えた。新聞記事のおかげで、「うどん部屋を知っています。懐かしいですね」と何人かから、声を掛けてくれた。若いと思っていた人が「うどん部屋」世代だとすると、かなりの年配だなあと驚いたりもした。

当日は桑高祭の開門と同時に列が並び、食券売出し開始の10時には200人が並び、予定の200食分は瞬く間に売り切れてしまった。作る方が追い付かないかと心配したが、食券を買った人はぼつぼつと食べに来てくれて混雑せずに済

んで、ほっとした。最後の 200 人目の人がなかなか現れず、ヤキモキしたが、やっと現れて喝采をあげた。桑員ホームニュースは 9 月 28 日号で当日の様態を掲載してくれた。備品購入は別枠として、当日の売り上げは 60,000 円 (@300 × 200 = 60,000) に対して原材料費 54,521 + 消耗品費 48,350 = 102,871 円で、42,871 円の赤字であった。しかし、初めの試みで、同窓生と在校生との繋がり、同窓会と学校との繋がり、同窓生どうしの繋がりを得る機会となった成果は、今後の同窓会運営に良き影響を及ぼすであろう。



桑名高校同窓会HP フェイスブックより